

「村上天皇御集」の性格

齋宮女御徽子女王との関わり

AN ANTHOLOGY OF POEMS OF TANKA MURAKAMI EMPEROR'S The connection with Saigu Nyogo Yoshiko Joou

角田 宏子 基礎教育センター 非常勤講師

Hiroko SUMIDA Center for Liberal Arts, Adjunct Lecturer

要旨

村上天皇は、文学活動を盛んに行なった平安時代前期の天皇であり、現存する「村上天皇御集」には、後宮の女御や更衣たちと詠み交わした歌が収録される。村上天皇の妻室は、十人以上知られるが、この歌集の半数以上を占めるのは、齋宮女御徽子女王との贈答歌である。徽子女王には別に、複数の本で伝わる「齋宮女御集」があり、「村上天皇御集」の歌とも重複している。特別に寵愛されたとは言えない徽子女王の歌が大量に収録された要因は、外在的事情のみならず、編纂者の意図に拠る。天皇と徽子女王との、調和的とは言えない贈答歌は、逆にうちとけた関係を示すものであると考える。編纂者は、村上天皇の私的な記録を残すにあたり、徽子との贈答歌がふさわしいと考え収録を容認した。同集第6番目の歌について、先行する論考は何れも、天皇が徽子の入内を心待ちにする歌だと見なしてきたが、これは女御述子の歌群に分類すべき歌である。編纂者は、人間村上天皇の生涯を記録するにあたり、天皇にとって重要な女性を、同集の冒頭部分に順に配置した。述子の歌群は、天皇の真情を反映させようとする編纂者の意図の表われであったと推測する。

Summary

Murakami Emperor is the emperor of Heian era. He did a lot of literary activities. Murakami Emperor Gyosyu(村上天皇御集) is an anthology of his poems tanka. The works of literature written by him and his wives are included in this book. Emperor and his wives exchanged tankas using letters. He has 10 or more people wives. Saigu Nyogo Yoshiko Joou(齋宮女御徽子女王) is one of the wives. Half of the book are works of Emperor and 徽子. Their gift-giving tankas have a dissonance, and are inharmonious. But their many tankas were recorded in this book. This is because their relationship was close and they were able to show openly their sentiment. An anonymous author was intended to record the Emperor's private life. The No.6 tanka in this book expresses his private sentiment. An earlier literature construed it as his hope. It construed No.6 tanka as the expression of the feeling he was looking forward to marry 徽子. I think it is different. It expresses the affection for another wife Nyogo Nobuko(女御述子). At the beginning of this book, the tankas of 述子 are placed. And also by this arrangement, an author could be recorded Emperor's personal sentiment.

1) 「村上御集」の位置づけ

①作品と先行研究

天皇の詠歌は、勅撰集や私撰集に採録されて後世に伝わるが、天皇ごとにまとめられた歌集もまた存在する。本稿では、そのような歌集の一である、平安時代の天皇（在位946～967）村上天皇の「村上天皇御集」—以下「村上御集」と記す—を取り上げる。

「村上御集」は、連歌1首および同集における類似歌も含め138首から成る。天皇の御集、とくに平安時代の御集を伝える伝本自体も少ないが、「村上御集」は、江戸時代初期の書写とされる「代々御集」なる写本一冊でのみ伝わる。先行研究としては、その翻刻と解説が久曾神昇『八代列聖御集』^{注1}や橋本不美男『桂宮本叢書』^{注2}にあり、また、私家集として『新編国歌大観』^{注3}と『私家集大成』^{注4}にも収録され、それぞれの解題で取り上げられる。作品の概観を『和歌大辞典』^{注5}より引用すると、次のようになる。引用に際し体裁は改めた。以下、特に断らない算用数字は、「村上御集」の所収番号とする。

書陵部蔵『代々御集』（501・845）所収の孤本である。一三八首（含連歌一組）から成るが、113以降は勅撰集による増補歌で、これを除くと集本体はほとんど女御更衣との贈答歌となる。

配列 1 御遊の歌

- 2～4 女御述子
- 5 御遊の歌
- 6～85 斎宮女御徽子（ただし82、83を除く）
- 86～89 中宮安子
- 90～93 宣耀殿女御芳子
- 94 「藤の女御」（芳子か）
- 95～98 広幡御息所計子
- 99～101 按察使更衣正姫
- 102～106 更衣祐姫（ただし斎宮女御集にあり）
- 107～108 芳子で再出
- 109 81との重出歌
- 110～112 御遊の歌
- 113～138 勅撰集からの増補歌

徽子との贈答はほとんど「斎宮女御集」にあり、密接な関係を有している。

（杉谷寿郎「村上御集」『和歌文学大辞典』）

作品研究には、堀恵子「村上御集の研究」^{注6}、今野厚子「『村上御集』の構造—配列の基準と編纂意図—」^{注7}、権赫仁「現存本『村上御集』に見る二部構成」^{注8}があり、その他、徽子関連の歌は、^{さいくうのにようごりこ(きし)じょうおう}斎宮女御徽子女王—以下徽子と記す—の研究でも取り上げられる。

上記「増補歌」に関して補足すると、巻末の26首が増補であることは早くから指摘されているのであるが、増補と言えるのは、『拾遺集』の所収歌が15首入るからである。『拾遺集』歌が入るのみならず、少なくとも113から121までは、『拾遺集』に収録される村上天皇の歌が、『拾遺集』に収録される先後の順に逆らわず、また詞書以外は歌本文に異同もなく並ぶため、『拾遺集』から順に取り出して「村上御集」に入ったものと推測される。116のみ徽子に関連するが、それ以外は徽子との接点がないためか、それらの『拾遺集』歌15首は、「斎宮女御集」—以下「斎宮集」と記す—諸本には全く入っていない。

②「村上御集」の祖本

現存「村上御集」の祖本についても、その形成のもとになった原型についても、詳しいことは分からない。漢詩集ではなく和歌集としての村上天皇の「御集」が存在したであろうことは、12世紀初頭の歌学書^{注9}から知られる。また、藤原通憲（1106-1159）が関係しているとすれば、「通憲入道蔵書目録」第八櫃に「天曆御集一帖」との記載があり^{注10}、平安時代後期に存在したようである。現存本については、久曾神論^{注11}の「現存本が清輔や顕昭の見たものであらうと考へられるのであり、平安後期に存在したものとよいのである」という見解が通説になっている。「村上御集」なる歌集は確かに存在したのであろう。ただし、それが現存の一冊にどの程度継承されているかは不明である。

『大鏡』にも、「村上御集」の存在に関わる記事が載る。徽子が琴を弾きながら天皇を思って和歌を口ずさんでいた。当該箇所を掲げる。

……と弾きたりしほどこそせちなりしか」と御集に侍るこそ、いみじうさぶらへ」といふは、あまりにかたじけなしやな。

(口語訳) ……と口ずさみながら、弾いているのを聞いていたときには、じつにしみじみとした感激にたえなかった」と、『齋宮女御集』に見える村上天皇の「御日記」にございますのは、まことに優雅なことでございますよ」と語りますが、後宮についての秘話なのであまりにも畏れ多いことです。

(橋健二校注・訳『大鏡』^{注12}、傍線部加筆 以下同)

最初の、「と弾きたりしほどこそせちなりしか」(と弾いていた時はさししまった感動があった)とは、自分を思ってくれている徽子の気持ちに触れた時の、天皇の感慨を記すものであり、その記載が「御集に侍るこそ」すなわち「御集」に存在するという。「御集」を「村上御集」とみる説^{注13}もあるが、この口語訳では、傍線部のように「齋宮集」に見える村上天皇の「御日記」としている。続けて、徽子の行為に触れた天皇の感慨に対し、「いみじうさぶらへ」(すばらしいことでございます)という肯定的評価がなされる。口語訳のとおり、優雅な出来事が評価されている。ここまでは、『大鏡』が引用する発言である。『大鏡』の語りはその後で、これを逸話として取り上げることにに対し、「といふは、あまりにかたじけなしやな」と全体をまとめている。

「御集」と『大鏡』との間に介在する「いみじうさぶらへ」の発言を、口語訳で「齋宮集」のものと特定されるのは、「齋宮集」で『大鏡』に類似する本文が存在するためである。「齋宮集」の中でも、当箇所が半葉白紙の書陵部本、定家監督書写本一以下本稿における「齋宮集」諸本の略称は、注記^{注14}のとおりとする一以外では、傍線部の箇所が、「とこそ御日記にはあなれ」(西本願寺本 15 左注)、「とそ御にきにありける」(定家筆臨模本 四才)、「とそ日きに」(小島切 5 左注)として載る。『大鏡』の当該箇所の解釈には、こういった「齋宮集」本文が援用されている。「齋宮集」には、何らかの天皇の「御日記」(日

き)が存在したと記されている。

村上天皇に関しては、「村上天皇御記」なる漢文の日記がある。今日知られるのは、拾遺の記事のみであるが、その『歴代宸記』^{注15}を見る限りにおいて、行事等公的な記録の中に、上記のような某日の一女御の行動とそれに対する天皇の感慨が記されていたとは考え難い。『齋宮女御集注釈』一以下『注釈』と記す一^{注16}は、「齋宮集」に見える「御日記」(日き)について、「村上御記」の付属的な存在で、漢文の日記とは「別に記された仮名の日記」であろうとする。「村上御集のものものかもしれない」とし、『大鏡』六十四代(円融天皇)の項に見える「村上御日記」も同様に仮名の日記であろうとされる。そうであれば、『大鏡』の記述のように、徽子という女御の歌が収められ、天皇の和歌も記されていたであろうことは想像に難くない。

「村上御集」の原型に関しては、堀論^{注17}が構造と併せ論じている。同論の歌番号には疑問箇所が存在するので、そのまま引用することは避けるが、<原型>を推測する観点として掲げられているのは、詞書の「年代別・女御別に整理」しているという要素である。女御の固有名詞を用いたり、「天曆元年七月七日」といった年号が入ったりする記述は、村上天皇と徽子との贈答歌の部分とは詞書の性質が異なっている。それら、「村上天皇の身辺の文書類を整理したもの」が、「村上御集」の<原型>として存在していたとする。同論では、村上天皇側の記録である<原型>に、齋宮女御関連の歌が、まず加わったという。それは、「天皇の贈答を“五月・六月・七月・しはす・む月・五月・しはす・十月・しはす・はる、と大体歳月の流れに従って編纂された部分」で、「御所本丙類齋宮女御集」^{注18}では、「1～52 までの 52 首」とする。

何故「御所本丙類齋宮女御集」の 1～52 であるのかという「齋宮集」との関わりについては、諸本を視野に入れ論じる必要があるが、今は、その形成論に依る用意がない。近年の構造論に、権論^{注19}がある。権論は、大きく 1～81 を第 I 部、82～112 を第 II 部とし、第 I 部は、1 と 5 を除き、「述子関連の歌群」と「徽子女王と村上天皇の贈答歌群」から成り、第 II 部は、天皇の公的晴れの歌 5

首(82・89・110・111・112)と九つの小歌群から成るとする。今野論^{注)20}は、「村上御集」と「斎宮集」諸本の「最大公約数的歌稿群」から時間展開を基にした独自の編纂意図を論じる。「御所本丙類斎宮女御集」の1~52という、この部分は定家筆臨模本系統には載らない歌群であったとは言えるようであるが、例外も存在する。また、論者は重複歌あるいは類似歌とされる歌、通算6首^{注)21}も重要な観点であると考えているが、形成論に関わる構造論については、稿を改めたい。

③本稿の方向性—堀論の展開—

本稿では、形態的、形成的、内容的に示唆に富む堀論^{注)22}を継承し、展開させたいと考えている。「斎宮集」諸本の包括はできていないが、堀論が問題として提起した、なぜ大部の徽子の歌が「村上御集」に入ったのかあるいは、入ることを容認されてきたのかという問題を論じたい。

いずれの先行研究でも、「村上御集」の6~85に、村上天皇と徽子との贈答歌群が置かれていることを大きな特徴として挙げる。これは形態的な現象としての特色であり、また、「村上御集」の編纂意図に関わる特色でもある。堀論では、「村上天皇の身邊の文書類を整理した」<原型>に、徽子との贈答歌群が加わり、さらに天皇方の資料が「自由にあてはめながら」追加され、現在の歌序となったという。形成過程については、大筋において堀論のとおりであろう。前掲『大鏡』の解釈で援用されていたような仮名の「村上御日記」が関わるとすれば、その「天皇方の資料」ということになる。

ところで、「村上御集」の記録的性格は、どのようなものか。個人歌集の分類では、「村上御集」に関して「社交圏記録としての私家集」の「範疇に入るといえなくもない」という位置づけがある^{注)23}。例えば、『枕草子』や「紫式部集」は、「後宮女房群を代表して書きとどめ」られたものであり、また、「大斎院前御集」は、大斎院の名を冠した「斎院女房の雑交記録」になっている。「村上御集」も、それに類する性格を有するものとの見解である。

「社交圏記録としての私家集」を見分ける条件は、「詠歌の応酬の核が多元化しているかいないか(常に贈答唱和の中心に家集標題歌人がいるかいないか)」であるとさ

れるが、「村上御集」の場合は、村上天皇の詠歌が主軸にあり、村上天皇を交えない贈答唱和群というものは基本的に見られない。その意味では詠歌の応酬が多元化しているとは言えない。したがって、同論が「帝王・権門のそれといえども、その人個人の歌を集積することを建前とした後代のそれとは違う」とされるところの、「後代のそれ」に、むしろ近いものである。詞書には確かに敬語が用いられており、「侍者(多くは侍女)の編集にかかる」と言えるが、同論の分類で言うところの、「帝王・権門のそれといえども、その人個人の歌を集積することを建前とした」歌集になっている。

「村上御集」の特徴の一は、それが「個人の歌を集積する歌集」になっていることである。堀論は歌内容から、「人間味溢れる天皇」の、個人的な歌集の造形を指摘する。同論では、帝王としての「自尊心に支えられた」強者の恋愛歌が見える一方で、また、外戚という権力を懸念する、天皇といえどもいわば弱者の歌と言えるような詠歌が見え、さらに天皇の哀傷歌が、人間味溢れる村上天皇像を形成していることを個々の歌で例証される

「村上御集」のもう一点の特徴は、徽子に関する歌群の存在の大きさである。他の妻室の史実や詠歌が少なからず存在するにも拘らず、「村上御集」138首のうち、冒頭近くの80首近くが徽子関連の歌で占められていることである。本稿では、これを積極的な肯定理由があったものと考えている。本稿は、堀論が以下のように論考を締め括る問題を承けるものである。

村上御集は、恋愛歌において、自尊心に支えられた強者の歌と権力を懸念する弱者の歌が対照をなし、数少ない哀傷歌が繊麗な印象を与えながら、人間味溢れる村上天皇像を形成している。しかし、その成立事情が段階的・つぎあて式であることを忘れてはならない。村上御集の中に、斎宮女御集の原初形態と思われる52首(ママ)がすっぽりはめ込まれていることの意味を考えずにはいられない。

(堀恵子「村上御集の研究」)

2) 「村上御集」に見る徽子との贈答歌

①贈答歌の一例

「村上御集」の冒頭近くに収録される、徽子関連の歌は、天皇にとっても徽子にとっても極めて私的な贈答歌である。私的な贈答歌という点では、「承香殿の睦みを思わせる」^{注)24}という、いわゆる「手習の歌群」(41~50)も存在するが、さらに13~17を取り上げたい。13~17は、時系列で配列された「村上御集」のうちの比較的前の部分であり、徽子側から見た詠作の時期は、入内より父重明親王薨去の頃までの、徽子の生涯における「第一期」^{注)25}の歌群である。

又五月の一日^{注)26}内の御、けふよりはいかに

13 さみやみおぼつかなのいとどまさらん

ときこえ給へりけるに

ながめする空はさのみや

と有りければ、又内より

14 いはでかくおもふころをほととぎす夜ぶかく

なきてきかせやはせぬ

御返し

15 ものをこそいはでの山のほととぎすひとしれぬ

ねはなきつつぞふる

六月のつごもりに給へりける御返しを桔梗

につけて、秋ちかう野は成りにけり、人の心

も、ときこえ給へりければ

16 秋ちかうなるもしられず夏ののにしげる草葉と

ふかき思ひは

かへし

17 夏すぐる野べのあさぢはしげれどもつゆにもか

る物とこそきけ

13 は、「さみやみ」が天皇の、「ながめする」が徽子の言葉で、連歌になっている。「齋宮集」でも詞書はほとんど変わらない。13の詞書は、日付に「内の御、けふよりはいかに」の言葉を加え、天皇が徽子へ言いかけたきっかけが、月の改まったことであると解説している。「村上御集」の編者による詞書は、天皇の言いかげが、あくまで

時節の挨拶であったと断っているのかもしれない。13が徽子との疎遠な関係を話題にしたのではなく、単に時節の挨拶であったと断っているのであろう。

「おぼつかなさ」^{注)27}は、ぼんやりとしている状況をいい、五月雨の頃は、空がいつそう暗い「五月闇」ゆえに気がかりであるという。「今日から五月で、闇もいつそう暗く不安な心情の募る時節だが、どうしているか」と天皇が尋ねた。五月闇は暗く物を隠すので、歌には、ホトトギスの声・虫の音・花たちばなの香り・数を増すように見える蛍・ともしに見える鹿の姿といった、五月闇にも隠れない素材を通して詠われてきた^{注)28}。

「おぼつかなさ」は、暗闇という自然現象に対してのみならず、その現象が人の心にもたらす心情にも表現された。

「このごろのゆふやみよりも人心おぼつかなさをなににたとへむ(「大齋院前の御集」111)」では、他者との関係が疎遠になっていることに対しての、捉えどころのなさが詠われる。

天皇の詞に対し徽子は、「ぼんやりと物思いに耽るのは五月に限ったことでしょうか、なにも五月に限ったことではありません」と答えている。天皇の詞が時節の挨拶として季節の現象を提示するのに対し、徽子の詞は人事に結びつけ自己の心情を露骨に表している。向いている方向は異なっているが、その詠じ方は似る。天皇の詞が空に目を転じてふと口にしたかのような詞であると同様、徽子もまた空に目をやって独り言を言っているかのようなようである。うち解けた詠歌を交わす間柄が前提となった贈答である。

14は天皇の返歌になる。『注釈』(79注)は、ホトトギスを天皇の使者とし、口には出さないが、私の深い思いをホトトギスはそちらへ伝えてくれないのかの意味とする。初句「いはでかく」とは、何故「いはでかく」であったのか。「口に出さないでこのように」思うとは、徽子への愛情表現を口に出して行わなかったことを気遣っているのであろうか。

『注釈』が例歌の一に「五月雨に物思ひをれば郭公夜ふかくなきていづちゆくらむ(『古今集』153/紀とものり)」を掲げるが、「いはでかく」は、例歌同様「五月雨に物思ひ」する天皇の、物思いの深さゆえの沈黙を示すものなの

であろう。徽子に対して言葉を発しないという性質のものではないと考える。五月闇の暗さの、それも夜更けのいっそうの暗闇に隠れないホトトギスの声は、甲高い声であって、天皇の物思いゆえの沈黙と対比して詠まれている。「ホトトギスは私の思いを伝えてはくれないのか」は主意であるが、天皇は自らの、口には出さない物思いを訴えているのである。

15 は徽子の歌であり、第二句の「いはで」で、天皇の詞を承ける。下句「ひとしれぬねはなきつつぞふる」は、「齋宮集」の同歌や「かずならぬみ山がくれの郭公人しれぬねをなきつつぞふる（『後撰集』549）」に見る、「ひとしれぬねをなきつつぞふる」が正しい。人に聞こえない声で鳴いて時を過ごしているという意味である。『後撰集』549 は、山奥のホトトギスゆえに声が聞こえないのであって、徽子の歌は、言わないという意味の「いはでの山」の地名にちなむホトトギスだから声が聞こえないのである。徽子は、「口には出さない（いはでかく）とおっしゃるゝいはで、のホトトギスなのですから、人には聞こえない声で鳴いているのでしょ」と応えている。

16 では、再び季節の変わり目の出来事として、天皇の歌が置かれる。16 は、徽子が「秋ちかう野は成りにけり、人の心も」と贈った詞に対する、天皇の返歌である。詞書に拠れば徽子は、その詞を「御返し」として贈っているというので、六月の末に天皇から何らかの消息があったらしい。

徽子の詞は、「秋ちかうのはなりにけり白露のおけるくさばも色かはりゆく（『古今集』440/とものり）」の一節を引いたものである。これは、露が下りて草葉の色が変わっていくという内容の歌であるが、「きちかう」即ち「桔梗」を詠み込んだ物名歌となる。『俊頼髓脳』や『奥義抄』といった歌学書にも取り上げられているので、心の移ろいを詠む歌としてよく知られていたのであろう。

旧暦六月は夏の終わりである。月末に天皇から、何らかの時節の挨拶があった。それに対し、徽子は正式な歌の形をとらずに返事をする。「ほんとうに、もう野は秋で、あなた様のお心も私を飽きられるゝあきゝになるのでしょ」と、『古今集』の歌の一節を引き、そこに「人のここ

ろも」という独言のような言葉を添え、物名歌にちなんだ桔梗につけて贈った、というのが「村上御集」の詞書である。

16 は、天皇の返歌である。「いやそんなことはない、飽きるなどとは想像も出来ないことだ。夏草はまだ茂っており（夏のものにしげる草葉と）、私の思いも同じように深い（深きところは）」という。天皇の歌は、徽子の疑念を打ち消す力を見せる。上句で「秋ちかうなるもしられず」ときっぱりと否定し、下句のいまだ草深い夏野の風景と重ね合わせて提示されるからであろう。

17 は徽子の歌である。天皇の強い思いの表明に、しかし徽子は、さらに疑念をはさむ返答をする。これは、徽子に限ったことではない。愛の表明を受け容れるか拒絶するかで言えば、受け容れているのである。しかし、その表明の内容を堅固なものにしたいがために、疑念の形を以て脆弱なところを問う。言葉遊びの要素は否定できないが、しかし、愛情を確認しているのである。

「あさぢ（浅茅）」は、「三十六人撰」に採られる徽子の歌にも詠まれていた。天皇は「夏の草葉」と言ったのであって、「ち」（茅萱）とは言っていない。徽子が、自らの心象に合わせて、あさぢ（浅茅）茂る情景を提示しているのである。「確かに、天皇がおっしゃるように夏の野はまだ草葉が茂っておりますが、それでも、秋になって露にかかれば枯れるものでしょ」と言う。

秋になれば、盛んに茂らせてきた夏の草葉も枯れるという。第四句「露にもかかる」を「齋宮集」（西本願寺本82/定家監督書写本 三才）は「つゆにもかかる」とする。

『注釈』（83 注）は、「露にかかる」が「露を頼りにする、露に寄りかかる意で、ここでは、露のようにはない御恩沢にも寄りかかっているというような弱みを見せることになり、贈答の歌らしくなく、また、「物とこそきけ」が落ち着かなくなるので」として例歌を挙げ^{注29}「つゆにもかかる」の本文を採っている。「村上御集」が「かかる」（枯れる）とし「齋宮集」が「かかる」（掛かる）とする。露がかかれば、草木は紅葉し枯れるので結果としては同じであるが、恩沢の意味を匂わせ間接的な「かかる」の表現に対し、「村上御集」では、「かかる」という直接的な否

定表現を徽子が採っていることを示している。

②詠歌における公私

「村上御集」に収録される徽子関連の歌は、天皇にとっても徽子にとっても極めて私的な贈答歌であったと考えられている。もっとも、「公的」「私的」という表現は相対的な捉え方に基づくので、状況を確認しておきたい。

日本最初の勅撰和歌集である『古今集』の理念は和歌の復権にあった。仮名序では、和歌の理想は、恋愛の、あるいは生活の生業の手段になってしまった(いろいろのみのいへにむもれ木の人しれぬこととなり)近年の和歌の状況ではなく、「いにしへ」同様に「まめなるところ」で詠まれることであるという。「まめなるところ」は、「天皇の御前」^{注)30}である。真名序と仮名序とでは表現に異なるところがあるものの、天皇が侍臣に和歌を献上させて君臣のむすびつきを体現し、和歌の効用を説く内容は共通する。これは、いわゆる「公的」な和歌の理想である。

村上天皇は、『古今集』に続く勅撰集である『後撰集』を撰集させた。現存のそれには序文がない。また、『古今集』との比較において物語的な詞書を持ち、「女房生活を「場」とともに伝える」女性の歌が多い^{注)31}といった、いわゆる「褻」の性格をもつといわれる。それでも、勅撰集の事業は、先代の勅撰集を意識し、その理念を根幹に据えた「公的」なものであろう。

村上天皇の御代で、『後撰集』以外に「公的」な記録に残る詩歌の記事を掲げてみる。

- A 比日。殿庭翫草花侍臣献和歌
(『日本紀略』天曆元年八月八日)
- B 於飛香舍有藤花宴。天皇出御。侍臣賦詩奏樂。
(同 天曆三年五月十二日)
- C 次召上達部侍臣於塗籠中有御遊。盃酒倭歌之後各給祿延喜例 (「西宮記十一御佛名」『歴代宸記』
天曆四年十二月三日)
- D 於藤壺天皇始觀。為平親王諸卿參入。竟宴。世間病患之間。不奏音樂。有和歌興。宴罷。給祿有差。
(『日本紀略』天德二年三月七日)

Aは、御殿の庭で、草花を愛でて歌が献上されたという。前日に南殿で行われた、儒教の儀式であるところの^{せきてん}積奠に関連する記事であろう。献詠は、南殿(紫宸殿)の前庭で積奠の後宴としてなされたのであろう。同様に、Cも侍臣が和歌を詠んで祿を賜ったという。これも同日の記事から、仏教行事であるところの^{ぶつみょう}仏名の後の宴席の様子を記載するものである。Bは漢詩についてであるが、D同様に、後宮の飛香舍(藤壺)における記事である。Dは、賜った祿に差があったとの記述から、歌は天皇に献上されている。

侍臣が天皇に献上した詩歌という点では、すべて「公的」な詩歌である。ただし詠歌場所に分ければ、Aの南殿に対してBDの後宮は、「私的」な場である。Cも^{ぬりごめ}塗籠である点では「私的」な場である。詠歌の場所による公私の観点については、たとえば、村上天皇時代に開催され、晴儀の最たる歌合とされてきた「天徳内裏歌合」でも、その開催場所が清涼殿西廂であったことをめぐって、「清涼殿東という晴の場では行われなかった」という、当時の和歌の地位が指摘される^{注)32}。

徽子の名を冠した「斎宮女御歌合」も伝わる。それは、徽子の殿舎である承香殿で行われたものという^{注)33}。上記のように開催場所を観点にすれば、歌合としては、公的な清涼殿よりもさらに私的な後宮の御座所である承香殿ということで「私的」な意味合いを帯びる。もっとも、その歌合に徽子の歌は見えない。それは、「徽子女王を主人役に、女御に仕える女房を左右の方人として」^{注)34}催すべく、村上天皇が計画されたものであり、歌は、当時の有名な歌人の壬生忠見に詠えられた。徽子の歌合だけでなく、同年春に麗景殿で行われた莊子女王を主人役とする歌合も、歌は、当時の有名な歌人である兼盛・忠見・中務に詠えられた。

何故、歌合に女御自身が歌を詠んでいないのか。それは、『後撰集』がそうであったことと関係するのであろう。『後撰集』の「作者の家系」は「后達の家系」とつながり、同集は、「后達のための和歌集であり、后達が楽しむために撰集された」。それが、「后達の歌が一首も入首していない」理由であるという^{注)35}。歌合の存在も、その延長線上にあろう。政治の世界に対して、後宮という「私的」な空

間に楽しみを創るものとして、それらの歌合があったが、観客である妻室たちを楽しませるために、天皇が計画された歌合は、「公的」なものである。

村上天皇の御代における詠歌の公私とは、侍臣の献詠が最も「公的」な性格を有し、そうでないものは「私的」な存在として分類される。しかし、後宮を基準にすれば、天皇が計画する専門歌人による歌合は、「公的」な性格を有する。歌会は基本的に催しであり、ある種「公的」な意味合いが強くなるのは当然である。主催者の意図や参加者の立場も影響する。

村上天皇と徽子との贈答歌が「私的」と言うときの「私的」な性格とは、以上のような「公的」な性格のものではないということである。そもそも、一対一の贈答である限り、詠歌の当事者以外が加わる歌会とは形態が異なるのであり、形態において既に「私的」である。

それでも、天皇と妻室との、同じく一対一の贈答歌のなかでも、徽子とのそれは異質である。「村上御集」に入る村上天皇と徽子との贈答は、極めて「私的」な性格を帯びている。前述のように、その贈答歌には、必ずしも調和的とは言えない性格が見られる。従来の研究は専らそれを、徽子の特殊な境遇に帰してきた。しかし、融和的ではない、形を整えようとはしないその贈答歌を、本稿論者は逆に、親しくうち解けた関係の現れであり、親しさゆえに詠み得た歌であるとする。「村上御集」に置かれる、本章①節で見たようなそれらは、極めて「私的」な贈答歌の性質を帯びているように見えるのである。

③歌人徽子の歌

「村上御集」の冒頭付近に置かれたのが、何故大部の徽子関連の歌であったのかということは問題である。何故、他の女御たちではなく、さらに、何故、極めて「私的」な贈答歌であったのかである。「村上御集」の成立を、村上天皇の崩御間もない時期である^{注36}とする論を前提にして、前掲堀論は、次のように説く。

村上天皇の崩御後、「村上御集」の資料とする和歌の提出が女御達に求められた。その際に「依然として現役で作歌活動していた」のが、徽子だけであったこと、すなわち、他の女御や更衣について、「述子と安子は既に他界、莊子

と祐子は出家、正妃と芳子は天皇の後を慕うように没する頃」であったことが要因とされる。

天皇の崩御後、何らかの「村上御集」の資料が収集されたが、女御がいなくなれば、それぞれに仕えていた女房たちも後宮を離れてしまい、手控え等の和歌の提出は不可能であった。したがって、徽子の生前に編纂されていた「斎宮集」を受け容れざるを得なかったということであろう。徽子の歌が大量に入った要因には、そういった外的事情があった。しかし、他に要因はないのであろうか。

徽子の人生が特異であって、「村上御集」の編纂者が注目した。それは内的要因になったと言えるであろうか。徽子は、醍醐天皇皇子である重明親王を父とし、当時の左大臣藤原忠平の娘寛子を母として生まれた。以下、徽子前半生の史実については、所京子「斎宮女御・徽子の前半生」^{注37}を参照している。天慶元年(938年)9月、徽子十歳の秋、徽子は斎宮として伊勢へ下向する。皇祖神である伊勢神宮に奉仕する女王として^{ぼくじょう}卜定されたからである。それから八年後、天慶八年正月に母親が亡くなったため任を解かれる。帰京したのは、斎宮を退出して間もなくのころであったという。その後、徽子二十歳の天曆2年(948年)12月に、村上天皇の後宮に入内した。この時、後宮では師輔の娘安子が女御となり、続いて実頼の娘述子が女御となり、さらに安子には親王も生まれていた。

「村上御集」に、徽子の歌が大量に入った要因は、徽子の特異な人生への関心に加え、徽子が優れた歌人であったからでもあろう。徽子の歌については、「斎宮集」の研究を通じ、多くの論考がなされている。後宮における徽子の立場や後の生き方を以て、歌が説かれている。親王の娘という高い家柄に加え、神に仕える斎宮であったという「特殊な経歴」^{注38}をもち、一女を設けるものの、入った後宮には他にも妻室がいたことで苦悩した。やがて父重明親王が^こ薨じ、後ろ盾がなくなる。村上天皇はさらに、徽子からすれば義母すなわち父の後妻であって安子の妹でもある登子を見初め、中宮安子の亡き後、^{ないしのかみ}尚侍として宮中に入れている^{注39}。徽子を取りまく状況はさらに深刻になった。村上天皇の崩御後、徽子は、娘の規子が斎宮に卜定されたのに伴い、娘に付いて再び伊勢へ下る。

徽子の歌は、特異な人生を反映させる。さらに、徽子は名高い歌人である。そのことは、「村上御集」に天皇と徽子との大部の贈答歌が採録される内的要因となった。

徽子の歌人としての名高さは、三十六歌仙の一人に入るといふ評価に窺える。三十六歌仙の概念は、藤原公任撰「三十六人撰」によって作られた。「三十六人撰」の成立年は不明であるが、『拾遺集』にも深く関わる公任は、村上天皇や徽子の生存年代に近く、その評価は参考になる。

「三十六人撰」に採られる徽子の歌は、次の三首である。本文は同集のもので掲げ、「齋宮集」に入る歌は所収本と番号を、「村上御集」に入る歌はその旨を併せ付記する。

ことのねにみねのまつ風かよふらしいづれのをより
しらべそめけむ

(西本願寺本 57/定家監督書写本 一七ウ)

かつみつつかげはなれゆくみづのおもにかくかずならぬ
身をいかにせむ

(西本願寺本 146/定家筆臨模本 四ウ/村上御集 103)

あめならでも人もなきわがやどをあさちがはらと
みるぞかなしき

(西本願寺本 41/定家監督書写本 一五オ/定家筆臨模本 九オ)

一首目「ことのねに」歌は、京都嵯峨の野宮で詠まれたという。『日本紀略』や「順集」の序から貞元元年(976年)10月27日のことと推定されている(『注釈』57注)。『拾遺集』には「野の宮に齋宮の庚申し侍りけるに、松風入夜琴といふ題をよみ侍りける」とある。作者と同時代の歌人である源順の家集「順集」には、この夜の詠歌事情が詳しく記されるので掲げてみる。以下「順集」諸本の略称は注記⁴⁰⁾のとおりとする。

伊せのいつきのみや、あきのみやにわたりたまひて
の後の、冬⁴¹⁾の山風さむく成りて、はじめはつかなぬ
かのよ、かのえさるにあたれり、ながながしきよを、
つくづくとやはあかさんとおもほして、みすの内に
さぶらふおもと人、みはしの本にまゐるまうち君たち

に歌よませあそびせさせ給ふ、うたのだいにいはく、
松のかぜよるのことにいる、これにつけてきけば、あ
し引の山おろしにひびくなる松のふかみどりも、む
ば玉のよはにきこゆることのおもしろさも、ひとつに
みなみだれあひ、ゆきかよひて、むべもむかしの風
松にいるといふことのしくを、つくり置きそめんとな
んおもほえける (書陵部本「順集」)

徽子の娘^{のりこ}規子が、齋宮に卜定された。かつての徽子がそうであったように、規子もまた伊勢神宮に奉仕することになり、潔斎のために野宮に入る、その後の秋のことであるという。「庚申に当たる夜、しっかりと夜明かしをしなれば(つくづくとやはあかさん)ということ、歌会が行われた。「みす」(御簾)の内には侍女達が、「みはし」(階段)の下には公卿達がお仕えしていた。歌題は「松のかぜよるのことにいる」(松の風夜の琴に入る)である。この題を契機に改めて辺りを見渡すと、嵯峨の山から風が吹いているようである。その山の松の深緑も、漆黒の夜に聞こえる琴の音の美しさも、「ひとつにみなみだれあひ、ゆきかよ、つた」という。

傍線部は、「しく」(書陵部本) / 「し」(資経本 四二オ) / 「しらべ」(坊門局本 四一ウ/素寂本 一六オ)と異同がある。平安時代後期の書写本で「しらへ」と書かれていた箇所⁴²⁾の連綿が誤写されたのであろう。「しく」「し」として伝わったのは、歌題が詩句を典拠にしていたことに拠る。『注釈』等で、典拠は、「李山番百詠」の「風松入夜琴」の詩句であろうと推定されている。波線部以下は、「むべもむかしの風松にいるといふことのしらべを、つくり置きそめん」が正しいであろう。すなわち、源順が、その夜の光景に古典の詩句を実感し、「なるほど昔の人は、こういった調べを“風松に入る”といった詞で見出し伝えたのだなと思われたことだ」と書かれていたと考える。

初冬の松風であったという。「松風」という詞は『万葉集』にも見えるが、池を波立たせる等、視覚的な意味で捉えられていた⁴¹⁾。それが、音に情趣を認められていくのは、順の関心のとおりに中国文学の影響に拠ろう。和歌の趣向としては、「まつのおとをことにしらぶるまつかぜはた

きのいとをやすげてひくらん（『古今和歌六帖』3403/作者は、後の撰集に貫之としても伝わる）」が、その初期のものである。松から奏でられる音は、琴の音のように聞こえた。伝貫之歌は、さてそれは、糸に見立てた滝の水を琴の絃としてすげて、風が奏でているのだろうか」と詠んでいる。伝貫之歌では、松風は琴の音である。徽子の歌でもそうであろうか。

松風は、松韻・松濤・松籟と言われてきた。海辺の松林を吹き抜ける波のような音(濤)、あるいはまた笛の音(籟)にも聞きなされた。茶の湯では、湯のたぎつ音に喩えられる。冷たい風が、眼前の嵯峨の松の峯から吹き下ろしてくる。徽子が詠み、順が実感した「松風入夜琴」とはどのような光景だったのか。

庚申の夜の松風は、「冬の山風」であり山おろしの風であったというが、「冬の山風さむく成りて」は、荒々しい風の音が次第に高まって行くことを予感させる。順や徽子が聴いていたのは、静かに高まり行く笛の音のごとき音なのではあるまいか。「松風入夜琴」の「入」は、やって来るという意味であろう。「を」は、「緒」で琴の絃をいう。琴を奏でていた徽子のもとに、松風が吹き下ろしやって来て琴の音と一体化する。いったいどの絃を奏でた時から合奏が始まったのだろうかという。「いづれのをより」の「を」に、裾野の「尾」を掛ける。

二首目の「かつみつつ」歌は、詠歌の事情が詞書で示される。『拾遺集』879の詞書「天曆御時、承香殿のまへをわたらせ給ひて、こと御方にわたらせたまひければ」に拠れば、後宮のある夜のことで、天皇が徽子の御殿の前を素通りし、他の妻室のもとへ行かれた。「齋宮集」(西本願寺本)の詞書には「御殿みし給へりける夜、いかなることかありけむ、御かたをすきつゝ、こと御かたにわたらせたまひければ」と記され、筆者の「いかなることかありけむ」という口吻が伝えられる。

「御殿みし給へりける夜」は、『注釈』が一解釈の可能性として挙げている「その夜が齋宮女御の御宿直の番にあたっていらっしやった」(146注)という予定をいうものであったのだろう。「村上御集」でも、前歌と同じ女御に関する歌として、詞書には「同じ女御、つぼねのまへをわ

たらせ給ひてこと御方にわたらせ給ひければ」と記されている。

「かずならぬ身」という詞は、「花がたみめならぶ人のあまたあればわすられぬらむかずならぬ身は(『古今集』754)」以降多く詠まれており、ものの数にも入らない、つまらない我が身の意味である。他の妻室との比較によって天皇の愛情が我が身にないことを感じた徽子が、自らを「かずならぬ身」と嘆いている。

「お姿を今日にしている一方で(かつみつつ)、同じお姿が、他の女性のもとへと遠ざかっていく(かげはなれゆく)。その心情は、水面に指で文字を書いても都度消えていくはかなさと同じであり、今の自分は、実体のない「かずならぬ」(物の数ではない)身である。そんな我が身をどのように考えたらよいのだろうか(かくかずならぬみをいかにせむ)」と詠んでいる。「ゆく水にかずかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふなりけり(『古今集』522)」が本歌となっており、「かく」に「このような」の意味と「文字を書く」意味とが掛けられている。

一方、同じ「齋宮集」でも、定家筆臨模本では、先のような詠歌の契機ではなく、「いかなるをりにかありけん御すゝりにいれたまふたりける」(四オ、四ウ)として、硯箱に紛れ入っていた歌であると記される。詠歌の事情は臙化され、手慰みに書いた歌のような扱いをされている。また、歌の初句も、「かはとみて」と異なっている。すなわち、「かはとみてかげはなれゆくみづのおもにかくかずならぬ身をいかにせむ」となる。

定家筆臨模本では「かは」は仮名であるが、それを忠実に書写したという資経本(六オ)では「河」と漢字に直され、意識して記されている。仮に、「河とみて影離れ行く水の面に」であれば、帝の姿が遠ざかっていく状況を川面に喩えたことになる。「かつみつつ」は、一方ではお姿を目にしながら一方では離れていくといった意味であったが、「かはとみて」であれば、遠ざかり行くお姿を、川面に映る姿のように乱れ消えるものとして喩えることになる。『拾遺集』のように詠歌の契機を細述した詞書では、臨場感伴う「かつみつつ」がふさわしく、硯にいつ入れたのであったか紛れ入っていたとする詞書の場合、川面に乱

れる姿という「かはとみて」がふさわしいと考えられ、本文異同がそれぞれに容認されていったのかもしれない。

三首目の「雨ならで」歌は、『拾遺集』1204に「東三条にまかりいでて、あめのふりける日」とあり、「斎宮集」(西本願寺本)詞書でも「三条の宮」で詠まれた歌とする。「東三条」「三条の宮」は、東三条殿で、徽子の父である重明親王の邸宅があった。『注釈』(41注)に拠れば、「二条南、町尻西に南北二町を占めていた」という。この歌が詠まれた時期について、同『注釈』は「父重明親王が亡くなった天曆八年九月以後数年間の作」とする。徽子の母親もすでに亡くなっており、両親亡き後の寂しい家を「浅茅が原」という荒れ野に喩えている。

「浅茅」は短いチガヤ(茅萱)である。殊更に植えられた植物ではなく、路傍や荒れた庭に自生する植物で、荒れた宿にも茂る。家屋の周辺や山の植物として『万葉集』にも詠まれていたが、次第に、紅葉する秋の浅茅や手入れの行き届かない、荒れ果てた野を想起させるものとして歌に詠まれるようになった。

「もる人もなき」に、守る人もいないの「守る」と雨が「漏る」の意味を通わせている。「雨は漏るが、雨以外に漏る、すなわち守ってくれる人はいない。ここは浅茅が原なのだ」という。「あさぢがはらとみるぞかなしき」の「みる」は、改めて実感したという意味であろう。後ろ盾のなくなった家が人がどのようになるか、そういうことは聞いていたし知っていた、しかし、いざ自分の身になると、「あさぢがはら」という言葉が改めて哀しいものとして実感されるというのであろう。

歌人徽子の代表歌とされたのは、この三首であった。詠歌の時代で言えば、後年の作は、一首目の「ことのねに」歌である。公任は、自身の多くの撰集で、この歌を取り上げている。松風と琴の音の見立てや、「を」の掛詞という技巧をもちながら、公任の称揚した、すっきりとした「姿」になっている点が、公任の撰集基準に叶ったのであろう。「庚申歌合」で与えられた題によって詠んだという、いわゆる題詠であるが、「順集」の言葉どおり、漢詩の詩情を体現する歌であったことが評価されたのであろう。歌人徽子の誕生とも言える一首である。

公任の撰んだ三首は、晩年から徽子の生涯を遡り、人生の縮図を示したともいうべき撰歌となっている。二首目は後宮での寵愛に関する、三首目は、後ろ盾を失くしたことにに関する、哀しみを詠う。ともに詞遊び的な要素もあるが、詞遊びゆえに醸し出される情趣も備わる。言葉遊びは、迫る感情を昇華させ、突き放すことでもたらされる述懐の調べとなる。第一首目の「ことのねに」歌についても、結句が「斎宮集」で「らし」「なり」という二通りの本文が伝わるが、いずれも間接的な関わりを示す言葉である。それが、傍観的で乾いた悲哀を備えている。

④村上天皇の歌

歌人としての徽子の評価は、先のとおりである。では、村上天皇の詠歌はどうか。生前あるいは生存年に近い勅撰集では『後撰集』に2首、『拾遺集』に16首、村上天皇の歌が見える。まず、生前の勅撰集である『後撰集』所載の2首を掲げる。

御返し	今上御製
をしへおくことたがはずはゆくすゑの道とほくとも あとはまどはじ	(『後撰集』1379)
御返し	御製
年のかずつまんとすなるおもにはいとどこづけを こりもそへなん	(同1381)

巻二十所収の「慶賀」に置かれ、ともに、即位前の歌である。一首目の「をしへおく」歌は、「太政大臣」忠平の家で詠まれ、詞書には「太政大臣」が「御本」に添えて歌を献上したと記される。忠平は、村上天皇にとっては母方の伯父にあたる。忠平は親王の前途をことほぎ、書物を贈った。書物は、書の手本とするための「三史五経のような儒学の書」とされる^{注)42}。それに対し天皇は、「我が身を祝ってくれる心によって、贈られた書物の教えに違わなければ行く道に迷うことはないだろう」と返礼している。

二首目の「年のかず」歌は、御所にしていた「藤壺」で詠まれた歌で、返歌の相手は忠平とされる。忠平は、薪に添えて「山人の樵れる(伐った)薪が多く(積む)の年を積む」という長寿をことほぐ歌を贈った。それに対し、天皇が返歌

している。「こづけ(小付)」は、荷物の上にさらにつける小さな荷であるが、贈られた「おもに(重荷)」である薪に、さらに「あなたの長寿をことほぐ追加の木を切り取って添えてほしい」^{注)43}と詠んでいる。

詠歌の契機が、それぞれ「太政大臣の家」への往訪、「梅壺」での応接、という私的な場面での贈答であったことは詞書から知られる。しかし、歌内容は、非常に丁寧なものである。贈られた歌の詞と内容とを尊重し、下臣に対するものでありながら敬意の窺える歌になっている。

これら、当代の勅撰になる、『後撰集』所載の天皇自身の和歌二首は、「村上御集」には収録されない。採録されないのは、それが天皇の即位前の歌であったことと大きく関係するのかも知れない。

次に、「村上御集」より、徽子以外の女御と天皇との贈答歌を掲げる。例えば次の贈答がある。

もろまさの朝臣のむすめの女御に

107 いきての世しにての後ののち^(マ)よもはねをか
はせる鳥となりなん

御返し

108 秋になることのはだにもかはらずはわれもかは
せる枝となりなむ

藤原師尹の娘芳子との贈答である。比翼連理の故事に基づいて贈答がなされている。天皇は、愛情が死後までも変わらないことを率直に表現し、返歌する女御の方もまた、天皇の詞を丁寧に用いて歌を作っている。「天皇のお心さえ変化しなければ」(秋になることのはだにもかはらずは)と、天皇が提示した光景を控えめに連理の枝の光景に移す。そして、「私も一心同体であるという連理の枝になりたいと思います」と詠む。歌は、「なりなむ」という強い詞で、何よりも強く天皇の愛情を受け容れる意志表示をしている。この贈答は『大鏡』にも採られ、同作品では、村上天皇の芳子への寵愛が述べられる。

また、次のような廣幡御息所計子と村上天皇との贈答も見える。

ひろはたの宮す所につかはす

95 あふ事をはるかにみえし月かげのおぼろけにや
はあはれとはおもふ

御返事

96 月影に身をやかさましあはれてふ人の心をいか
でみるべく

源庶明の娘で更衣である計子と、村上天皇との贈答である。天皇の歌95は、「逢うことは遙かなものとなってしまうが、私の愛情は遙かな月のかすむ月光のように、なみ一通り(おぼろけ)なものではない」という。この歌を採録する『新古今集』1256本文では、第二句を「はつかに」とする。「はつかに」「はるかに」は、ともに第三句の月光の属性であるが、間遠な逢瀬を表現する。

『新古今集』が「はつか」(幽か)とするのは、「はるか」(遙か)では、後宮に侍る妻室と天皇との関係において、矛盾するとの判断がなされ、異伝が生じたのかも知れない。もともと、「はるか」は、物理的な距離ではなく誇張表現であり逢いたい気持ち強さを示すものであろう。

天皇の歌の主意を、計子は、全面的に受け容れ、月光に身を変えて、その天皇のお心を見たいと言う。「いかでみるべく」は、なんとかして見られるようにという、計子の意思であり、また、天皇の詞、すなわち「おぼろけ」な月光という詞を尊重して、返歌に利用したものである。

広幡御息所計子との贈答には、『拾遺集』にあって「村上御集」には載らない次の連歌もある。

ひろはたのみやす所、内にまゐりておそくわたら
せたまひければ

くらすべしやは今までに君

とそうし侍りければ

とふやとぞ我もまちつるはるの日に

(『拾遺集』1182)

遅く来られた天皇に「春の長い一日を今ごろになるまで、待ち暮らせとおっしゃるのですか」と恨みごとを言う計子と、「私の方も、訪ねてくるかと、春の長い一日を待つて

いたのだ」と答える天皇との連歌である。恨みごとと、その反論ではあるが、ともに待ち遠しかったと訴えるもので仲むつまじく、詞が寄り添うように調和的な歌である。

村上天皇の贈答歌は、『後撰集』に入る歌も、他の女御との間で交わされた歌も、非常に調和的である。そういった、天皇をめぐる調和的な贈答歌を見ると、徽子とのやりとりは、やはり異質である。天皇と徽子との贈答歌の、前掲「村上御集」13～17の箇所について、「連歌仕立ての贈答はうてばひびくものであった」^{註44}とされる鑑賞もあり、当意即妙だと言える。しかし、調和的ではない。

前章で掲げた13～17の詞書は、天皇からの消息が月を隔てた間遠なものであることを示していた。そして、歌の方は、互いに詞を探しながら心を通わせようとするものではなかった。ある種の不協和音も生じている。「村上御集」の編纂者は、そういった記録を容認し残しているのである。

「村上御集」の詞書には敬語が用いられており、「侍者(多くは侍女)の編集にかかる」性質が指摘されていることは先に述べた。「村上御集」の内部構造の研究からも、編纂者の存在は確かなものであった。今野論^{註45}は、「村上御集」に「斎宮集」とは「明らかに異なる編纂者の意図が認められる」とする。

「村上御集」の編纂者は、歌集としての体裁を整えようとしていた。今野論は、「斎宮集」諸本から「最大公約数的歌稿群」を整理し、詠歌時期を特定できる九つの歌群に分類する。その最初の歌群の前に、「斎宮集」諸本が持たない6「ふく風の」歌、すなわち徽子の入内歌を配置したことこそ、「村上御集」の編纂者が「時間展開を基に贈答歌群を構築しようとしたことの現れ」であるという。それら「最大公約数的歌稿群」が「時間の推移を基本に、共通性のある素材・連想によって相互に緊密な連続性をもつべく配列されている」という。6「ふく風の」歌に対する見解は別としても、編纂者が「斎宮集」からの資料をそのままに用いたのではなく、独自の配列意識を以て編纂していたことは、その論から窺える。

次章で述べるように、編纂者は、村上天皇の生涯において重要であった女性を、積極的に提示したと考える。村上天皇にとって、徽子は、親しい日常生活の中にいる女性で

あった。必ずしも寵愛された女性ではなく、神に仕えていたという特別な女性でもあった。しかし、残されていたのは、親しい間柄にこそ生じる大部の贈答歌であり、編纂者はそれを「村上御集」に入れたのである。「村上御集」の編纂の意図は、天皇の生涯の記録を、主として私的な側面からまとめることであったと考える。次章に述べるように、冒頭歌群には、その意図が積極的に示されている。

3) 「村上御集」における冒頭歌群の意図

① 述子^{のぶこ}への思い

次に掲げるのが、「村上御集」の冒頭部分である。「村上御集」の<原型>と推測される、詳細な年次を記した詞書を持つ歌1で始まり、2～4に実頼の娘述子にまつわる天皇の歌が置かれる。そして、6が、いわゆる徽子の入内歌で、6が入内前、7が後朝の歌である。

天曆元年七月七日、うへのをのこどもに歌よ
ませさせ給ひける次に

1 こひわたるとしはふれどもあまの川まれにぞかかる
せには逢ひぬる

さねよりの大臣のむすめまゐりて、朝に

2 むばたまのよるのころもはとほけれど夜ぶかき物
とおもひしらずや

おなじ女御〔 〕せ給ひて、雪のふる日

3 ふるほどもなくてきえぬるしら雪は人によそへて
かなしかりけり

物の中に御ふみの有りけるを御覧じて

4 みながらになみだのみこそながれけれどどめおき
ける玉づさにより

四年三月十四日ばかり、藤つぼにわたらせ給
ひて花をらせ給ふついでに

5 まとゐしてみれどもあかぬ藤のはなたたまくをし
きけふにも有るかな

しげあきらのみこの女御のまだまゐらざりけ
るにさくらにつけて

6 ふく風のおとにききつつさくらはなめにはみえで
もちらす春かな

徽子女御まゐりはじめて、あしたに

7 おもへども猶あやしきはあふ事のなかりしむかし
なにおもひけむ

御返し

8 むかしともいまともいさや〔 〕おもほえずおぼ
つかなさは夢にや有るらん

1～5 が「村上御集」の〈原型〉の一部と推定されることは先に述べた。村上天皇の「御日記」なるものが存在したとすれば、その「御日記」には、巻末に増補されたような、あるいはまた、それよりも前に載る「天皇の公的晴の歌」^{注)46}が他にも存在したであろう。しかし、「村上御集」の冒頭には、これらの歌が置かれている。

1「こひわたる」歌は、詞書に「天曆元年七月七日」とあり、^{きこうでん}乞巧奠の宴で詠まれた歌であろう。村上天皇は、前年の四月に即位し、年号は当年の四月に「天曆」に改元されている。改元まもなくの即位後最初の乞巧奠の歌である。七夕の故事にちなみ、天の川と瀬の縁語「かかる」に、「このような」という意味と牽牛が織女に会うために川を渡っていく際の「浪しぶきがかかる」の意味をもたせる。「恋しい者どうしが長い月日を恋い焦がれて過ごすというが、しかし、七夕の今宵、まれにはこのような逢瀬もあったことだ、天の川にも渡る瀬があるのだ」と詠う。年に一度しか逢えないという状況に対し、追いつめられたような印象の歌が少なからず詠まれる一般的な七夕の歌に比して、村上天皇の歌は鷹揚とした読み振りである。殿上人をあつめての君臣和楽の歌であると言える。

2～4 は、女御述子の入内と死に関連する歌である。述子は太政大臣実頼と時平娘との間の三女である。述子が東宮に入ったのは、天慶九年十一月で、同年に女御となった。翌年懐妊したが、疱瘡のため天曆元年十月に十五歳で亡くなっている^{注)47}。村上天皇が元服した際の東宮妃は、実頼の弟右大臣師輔の娘で、後に皇后となる安子である。述子の入内は、その安子に次ぐものであった。

2「むばたまの」歌は、述子が東宮に入った折の後朝の歌である。「一夜を過ごした慕わしい夜の共寝の衣は、今別れて遠ざかってしまったけれども、あの夜の闇が深かつ

たように、私の思いは深い。ご存じないか深いのですよ」という天皇の歌である。3「ふるほども」歌は、「述子失」という本文が欠損しているのであろう。非常に愛した述子が亡くなった。述子が亡くなったのは十月であるというが、その後まもなくであろう雪の降る日、述子のことが思い出されたという。「降っては消えていく雪は、降るとも言えないほどにはかない。その白雪が述子に思われて悲しい」という。若くしてあつてなく亡くなった述子が、天皇の歌の中で清らかな白雪に喩えられている。

4「みながらに」歌も述子の亡くなった後の天皇の悲しみを詠う。村上天皇は述子の文を見つけたという。「流る」「留む」が対照的に詠み込まれているが、技巧を全面に出した歌ではない。「物に紛れていた文を見て、涙が流れる。流れ続けるのだ。ここに厳然と留められているせいで、留められているにもかかわらず、涙はとめどなく流れるのだ」と詠う。述子の歌は残っていない。いずれも、天皇の愛情の深さが強く表われている。

述子の存在については、「述子は、その出自・後見からしても村上天皇が決して疎かに扱うことの出来ない人物であり、当時の述子の存在感は『栄花物語』や『大鏡』からは読みとることの出来ない大きなものだったといえよう」^{注)48}という、近年の評価もある。

5「まとゐして」歌は、82の重複歌であり、82には天曆四年三月十四日のことであると記される。この歌は、当時「藤壺」にいた安子に関わる歌であろうか。憲平親王の立太子は二ヶ月後であり、確かにその存在は大きい。しかし、この歌の主意は、本来は侍臣が詠むべきところを「ついでに」詠まれた天皇の感興にある。詞書の「藤つぼ」で某かの妻室を示唆することよりも、「まとゐして」という後宮のある時間を提示したかったのではあるまいか。「まとゐして」気心の知れたものが集い、藤の花を見ている。述子を亡くした天皇の心をしばし慰めたひと時を詠出した歌として置かれているものと考えられる。

②徽子の入内歌

6「ふく風の」歌は、徽子の入内にまつわる歌である。「しげあきらのみこの女御」すなわち徽子が入内したのは、天曆二年(948年)で、詞書は、村上天皇が徽子の

入内前に詠んだ歌であると記す。先行研究の全てが、この歌を、天皇が徽子の入内を待ち望む歌であると解釈している。「この詠の存在で、天皇の懇望よっての入内を裏付ける」^{注49}とする論もある。

詞書より、この歌が、徽子に贈ったものと解釈されるからであろう。同歌は『玉葉集』『万代集』に収録されているので、当歌をめぐる詞書を全て掲げてみる。

しげあきらのみこの女御のまだまゐらざりけるに、さくらにつけて
 (「村上御集」6)
 斎宮女御いまだまゐり侍らざりけるとき、さくらにつけてつかはさせ給うける
 (『玉葉集』1250)
 斎宮女御いまだまゐりたまはざりける時、さくらにつけて
 (『万代集』1863)

徽子なる人物が明記されているので、当然天皇が「さくらにつけて」歌を贈った相手が徽子だと考えられてきたのであろう。しかし、述子の歌群につながるものだとすれば、贈った相手は、述子の父実頼であったとは考えられないか。『栄花物語』巻一には、述子の死を悔しがる実頼について記す記述があり^{注50}、また、実頼が述子の死を嘆く次のような歌も伝わる。

女御述子かくれてのはる、はなを見て 清慎公
 みるからにたもとぞぬるさくらばなそらよりほか
 のつゆやおくらむ (『続古今集』1399)
 むすめの女御うせて後こと人まゐり侍りけるを
 ききて、内にさぶらふ女房のもとへつかはしける
 清慎公
 ここのへも花のさかりになるなかに我が身ひとつや
 春のよそなる (『玉葉集』2305)

6の詞書に徽子の名前が挙がるのは、贈歌の相手としてではなく、詠歌の時期を示す意図からではないか。徽子の入内を待ち望む歌とされてきた6は、風の音はするが目に見えないところで風が桜を散らしていると詠う。詞書には、そのような歌を桜の枝につけて某人に贈ったのだとある。

この歌を、詞書に見える徽子に寄せれば、「風の音」は、徽子についての噂であり、「めにはみえで」は入内前のまだ見ぬ女性ということになる。しかし、桜を入内前の女性に喩えていると見ることは出来ても、その桜を「ちらす春かな」と結ぶところに何か齟齬するものがあるように思う。

「ちらす春かな」という用例を他に見ない。「ちらす」は、古く『万葉集』では対象が梅花の花弁であった。動作主体は、雪交じりの風(『万葉集』4301)、春雨(同1932)、木伝う鶯(同4301)と見えるが、その後あまり用例がない。ともに愛すべきものが壊されていく負のイメージを伴うのが「ちらす」である。「村上御集」には、御前の桜を折って作られた次の歌がある。

89 宮人のこころをよせてさくらばなをしみとどめて
 ほかにちらすな

これは、「皆が心を寄せる桜の花であるから桜よ、花を散らすな」と詠んでいる。「ほかにちらす」は、宮人の知らないところでという意味であろう。天皇の歌は、桜の美しさを占有したいという心情を詠み、「ちらす」そのものには、負の要素がある。

6を収録する『玉葉集』『万代集』は、結句を「過ぐる春かな」として載せている。それは、この「ちらすはるかな」という結句を詞書と結びつけることに疑問を持ったからではあるまいか。すなわち「ちらす」に伴う負の印象を変えようとしたものではなかったか。両集が採る本文の形「過ぐる春かな」は、和歌の世界では、人事あるいは別の自然現象とは関わりなく過ぎていく春を意味する。「目には見えでもちらす春かな」は、徽子の入内を前にしても、それとは関わりなく刻々と過ぎていく時への思いを提示するものであろう。

6「ふく風の」歌は、徽子の入内前の歌であるというが、「斎宮集」には収録されていない。入内前の歌で徽子側にはあずかり知らない歌である、と言えそうだが、それは、徽子に贈られた歌ではなかったからではあるまいか。入内に伴う天皇の心情が詠まれた歌ではなかった。例えば、新しい妻室を心待ちにするような心情でもなく、たとえば入

内を促すにも叶わず、その相手が入内に対して積極的ではない状況を、散る桜に喩えているといった恨みの心情でもなかったと考える。

では、この歌の主意は何か。これは直前の、女御述子の死を引きずる感情であろう。「村上御集」の巻頭歌は、御集の巻頭にふさわしく即位後の君臣和楽の歌であった。その後には置かれるのは、述子に関する歌群である。5は、悲しみの中にあつた天皇の心を慰めた一ときを描く歌であり、そういった女御述子の死を悲しむ一連の天皇の感情と6は、続いている。

「目には見えでもちらす春かな」は、過ぎ去りゆくものへの視点から生まれた詞である。季節は過ぎゆく。それは、「目には見え」ないところで動いている。徽子入内の話があつて天皇の耳には入る。しかし、天皇の心は、亡き述子に囚われて動かない。「吹く風の音に聞きつつ」という徽子入内の話は、移りゆく春同様、移りゆく人事を天皇が間接的に受け止めている表現であつて、徽子そのものへの心情が詠まれた歌ではないと考える。そして、7「おもへども」歌以下、天皇と徽子との贈答歌が、前述のように「斎宮集」と重なる形で、そのまま当てはめられていく。徽子の名前が見える6の詞書は、詠歌の時期を表すために記されたものであり、6は、直前の述子の歌群に分類すべき歌であると考えられる。

4) 結論

孤本で伝来する「村上御集」は、ほとんどが女御や更衣との贈答歌から成る。なかでも斎宮女御徽子関連の歌は、半数以上を占め、「斎宮集」の歌と重複している(本稿1-④)。何故、徽子の歌がまとまった歌群として、それも冒頭近くに収録されているのか。第一に「村上御集」の制作時に資料として「依然として現役で作歌活動をしていた」徽子の「斎宮集」しか存在しなかったからである、という外在的要因の指摘がある(1-③)。第二に、徽子が優れた歌人であったからである(2-③)。一方で、天皇と徽子との贈答歌は、極めて「私的」な様相を呈しており(2-①)、それは、村上天皇の側からも言える(2-④)。「村上御集」に「斎宮集」とは異なる編纂の意図を見ようとする

るのが近年の研究であるが、編纂者は、天皇に近侍していて、「私的」な贈答歌を敢えて残そうとした。それは、人間村上天皇の生涯を記録するのに必要だったからである(2-④)。編纂者は、同集の冒頭部分に、人間村上天皇の生涯を語るのに最もふさわしい女性を順に配置した。まず、若くして亡くなった述子に対する天皇の思いを尊重し、歌群を設けた(3-①)。従来、徽子の入内歌とされてきた6「ふく風の」歌は、直前の述子の歌群に分類されるべき性格の歌である(3-②)。続けて、身内のごとくうち解けた贈答歌を残していた徽子関連の歌群を入れた、あるいは入れることを容認した。「村上御集」が、「帝王・権門のそれといえども、その人個人の歌を集積する」性格の家集であったことが、冒頭歌群から分かる。編纂者は、極めて「私的」な家集を作ろうとしていたのである。

注

- 1) 久曾神昇、「八代御集解題」『八代列聖御集』、文明社、1940
- 2) 橋本不美男、「御集解題」『桂宮本叢書 第二十巻』、養徳社、1960
- 3) 橋本ゆり、「村上天皇御集」解題『新編国歌大観 第七巻 私家集編Ⅲ』、角川書店、1989
- 4) 橋本不美男、「村上天皇(村上御集)」解題『私家集大成』第一巻 中古I、明治書院、1982
- 5) 杉谷寿郎、「村上御集」『和歌大辞典』、明治書院、1992 第三版
- 6) 堀恵子、「村上御集の研究」『平安文学研究』60、平安文学研究会、1978
- 7) 今野厚子、「『村上御集』の構造—配列の基準と編纂意図—」『天皇と和歌—三代集の時代の研究—』、新典社、2004
- 8) 権赫仁、「現存本『村上御集』に見る二部構成」『和歌文学研究』81、和歌文学会、2000
- 9) 引用歌に続けて、『俊頼髓脳』では「延喜、天曆両帝の御集を御覧ずべし」とあり、『奥義抄』の注記では、複数の出典の一として「此歌在村上御集」と記す(ともに『日本歌学大系 第壹巻』、風間書房、1991 第7版)。
- 10) 「通憲入道蔵書目録」『群書類従 第28輯雑部』、群書類従刊行会、1979 訂正三版
- 11) 前掲書 注1
- 12) 橋健二校注・訳、「道長下」『日本古典文学全集 20 大鏡』、小学館、1960 第13版
- 13) 前掲書 注1
- 14) 以下の【】が略称である。
【西本願寺本】…「さいくうの女御(西本願寺蔵「三十

六人集)』/【小島切】/【書陵部本】(堀論所載名「御所本丙本」)…「齋宮女御集(書陵部蔵 501・162)」以上『私家集大成 中古I』、1973 所収/【定家筆臨模本】…「齋宮女御集 定家筆臨模本」『冷泉家時雨亭叢書 19 平安私家集六』、朝日新聞社、1999 /【定家監督書写本】…「齋宮女御集」『同 17 平安私家集四』、同、1996/【資経本】…「齋宮女御集」『同 68 資経本私家集四』、同、2005 15)「村上天皇御記」『増補史料大成 第一卷(歴代宸記)』、臨川書店、1965
 16) 平安文学輪読会、『齋宮女御集注釈』、塙書房、1981
 17) 前掲書 注 6
 18) 堀論中に「御所本丙類」の函架番号は記されていないが、同論所載の内容からも、通称「書陵部本」と記されてきた「齋宮女御集」(書陵部蔵 501・162)の本文である。親本が「定家監督書写本」であることは、「齋宮女御集」(前掲書 注 14【定家監督書写本】) 解題)に指摘されている。
 19) 前掲書 注 8
 20) 前掲書 注 7
 21)「村上御集」には、重複歌および類歌が通算 6 首ある。歌番号で挙げれば、5 (82)、9 (137)、18 (127)、37 (134)、81 (109)、90 (118) の 6 首である。
 22) 前掲書 注 6
 23) 後藤祥子、「私家集の位置」『日本文学講座 9 詩歌 I (古典編)』、大修館書店、1988
 24) 山中智恵子、「涙川と衛士の焚く火—天暦七年の相聞」『齋宮女御徽子女王』、大和書房、1986 新装版
 25) 森本元子、「齋宮女御集の構成と成立」『私家集と新古今集』、明治書院、1974
 26) 13 歌詞書「五月の一日」について、「齋宮集」とで本文の異同があるが、「けふよりは」という表現が月初めを表すと考えれば、「一日」が正しいと考える。
 27) 13 歌第二句「おぼつかなの」は、「齋宮集」にある「おぼつかなの」の本文が正しいとして考察している。
 28) ホトトギスの声(『拾遺集』124) / 虫の音(同 178) / 花たちばなの香り(『金葉集二度本』148/『新古今集』242) / 数を増すように見える蛩(『詞花集』74) / ともしに見える鹿の姿(『千載集』196) 等。
 29) はなざくらをるにたもとのひちぬれば露にかかれる色にぞありける(『古今和歌六帖』4218) / うつせみのわびしきものは夏草の露にかかれる身にこそありけれ(「新撰万葉集」67)
 30) 小沢正夫 松田成穂校注・訳、「頭注」『新編 日本古典文学全集 11 古今和歌集』、小学館、1994
 31) 片桐洋一校注、「解説」『新 日本古典文学大系 6 後撰和歌集』、岩波書店、1990
 32) 滝川幸司、「儀式の場と和歌の地位—天徳内裏歌合をめぐる—」『和歌文学会論集 和歌を歴史から詠む』、笠間書院、2002
 33) 萩谷朴、「天暦十年〔三月廿九日〕 齋宮女御徽子女王

歌合」解題『平安朝歌合大成増補新訂第一巻』、同朋舎出版、1995
 34) 同上、「天暦十年〔二月廿九日〕 麗景殿女御荘子女王歌合」解題『同上』、同上
 35) 杉谷寿郎、「後撰集の撰集—村上天皇と後宮」『季刊文学・語学』17、1960、三省堂出版
 36) 前掲書 注 1
 37) 所京子、「齋宮女御徽子の前半生」『皇學館論叢』5-5 皇學館大学、1972
 38) 加藤敏明「齋宮女御徽子女王の一生」『國學院大學紀要』39、國學院大學、2001
 39) 西丸妙子、「尚侍藤原登子について—齋宮女御徽子との関連において」『福岡国際大学紀要』2、福岡国際大学、1999
 40) 以下の【】が略称である。
 【書陵部本】…「順集」『新編国歌大観 第三卷 私家集編 I』、角川書店、1985/ (底本) 書陵部蔵「歌仙集(511・2)」/【坊門局筆本】…「源順集」『冷泉家時雨亭叢書 16 平安私家集三』、朝日新聞社、1995/【素寂本】…「順集素寂本」『同 72 素寂本私家集 西山本私家集』、同、2004/【資経本】…「源順集」『同 66 資経本私家集二』、同、2001
 41) 天降付 天之芳来山 霞立 春尔至波 松風尔 池浪立而 (以下略) (あもりつく あめのかぐやま かすみたちはるに いたればまつかぜに いけなみたちて) (『万葉集』259) / 室戸在 桜花者 今毛香聞 松風疾 地落良武 やどにある さくらははなは いまもかも まつかぜはやみ つちにちるらむ (『同』1462)
 42) 前掲書 注 31 注釈
 43) 同上書 注釈
 44) 前掲書 注 24
 45) 前掲書 注 7
 46) 前掲書 注 8
 47) 「日本紀略」天暦元年十月「五日丙戌。女御藤原述子卒東三條第。年十五。依瘡瘡之間産生也。號弘徽殿女御。左大臣女也。』『日本紀略 第三(後編)』、吉川弘文館、1988
 48) 高橋由紀、「一条朝以前の後宮について—史料・歴史物語・和歌—」『国文学研究資料館平成 20 年度研究成果報告 物語の生成と受容④』、人間文化研究機構国文学研究資料館、2009
 49) 高野晴代、「齋宮女御徽子女王—再度の伊勢下向をめぐる—」『平安文学と隣接諸学 6 王朝文学と齋宮・齋院』、竹林舎、2009
 50) 「九條殿[の]御けしき、世にあるかひありてめでたし。小野宮の大臣、女御の御事を口惜しくおぼしたり。」、松村博司 山中裕校注、『栄花物語 上』、岩波書店、1993 新装版
 その他、断りのない和歌の引用は、『新編国歌大観』(角川書店) 各巻に拠る。